

＜特別支援教育＞

自閉症・情緒障がい学級における納得のいく進路選択ができる生徒の育成

～ 3年後を見据えた自立活動の実践を通して ～

大垣市立東中学校 教諭 太田 勇治

概 要

本研究は、4年間の特別支援学級の自閉症・情緒障がいの担任する中で、仲間とのコミュニケーションや進路への不安な生徒が多いため、自立活動の指導を保護者と連携して行うことで、納得のいく進路選択ができることを目的とした。また、本校の特別支援学級（自閉症・情緒障がい学級）では、初めて自立活動の指導を行ってきたため、3年間を見通した進路選択をするためのカリキュラムを形成する上でも必要であると捉えている。

この実践では、自立活動の6区分27項目の観点についての実態把握を行い、「個別の教育支援計画」を活用して指導の優先順位を検討しながら、指導の方向を保護者と共通理解して指導にあたった。生徒が、学校生活や集団の中で安心して生活できるようにソーシャルスキルと3年後を見据えた進路指導の自立活動の授業実践を中心として、教育活動全般に渡って取り組み、納得のいく進路選択をする生徒の姿を生み出すことができた。

1 主題設定の理由

(1) 学習指導要領の視点から

大垣市は、早期からの継続的支援として特別支援教育を掲げ、令和7年度学校教育指導の方針と重点の1つとしている。

特別支援学校の教育課程において特別に設けられた自立活動は、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」ことが目標である。

岐阜県の特別支援学級に在籍する中学生は、私が本校に赴任した令和元年度で1229名（内大垣市99名）から令和7年度で2095名（内大垣市157名）であり、7年間で1.7倍と大幅な増加傾向にある。岐阜県の「第4次子どもかがやきプラン」のもと、一人一人に応じたきめ細かな教育、自立活動の指導の充実が求められている。

(2) 生徒の実態より

私が本校の特別支援学級（自閉症・情緒）の担任になって4年目となる。

◆本校の特別支援学級（自閉症・情緒）の生徒数◆

(人)	1年	2年	3年	合計
令和4年度	1	1	1	3
令和5年度	2	1	2★	5
令和6年度	3	4★	1	8
令和7年度	4	3	5★	12

(★通常学級から措置替えで生徒が増えた年)

4年間で令和7年度に入級した1年生4名（教科担任）以外の12名の担任をした。多くの生徒が集団で生活することが苦手であったり、人とうまく関係を築けずに困ったりする特性がある。また、見通しをもって生活や学習することが苦手な生徒が多い。

そして、2名（生徒B、生徒C）の生徒は小学校の時に、知的学級に所属していたが、中学校卒業後の進路を見据えて、中学校入学時や小学校6年生の時に措置替えをし、本校では自閉症・情緒障がい学級に所属している。その他、学習障がいの診断をうけて措置替えした生徒も所属している。

さまざまな特性をもつ生徒が所属するため、毎年、年度初めに、学校生活で望むことや自己分析を生徒全員に対してアンケートを実施している。

12名の回答は以下の通りである。

○学校生活で望むこと

- ・教室が落ち着く安心・安全な場所である。
- ・予定の見通しがもてる。
- ・少人数のため分からないことが聞ける。

△不安に思う点

- ・交流学級の生徒との関わり方
- ・通常学級の学習についていけるのか。
- ・高校進学に向けて何をしたらよいか分からない。

各生徒の「個別の教育支援計画」を用いて、5月に保護者と面談を行った。多くの保護者が、「人間関係の作り方やコミュニケーションの取り方」、「先が見えない時の対処の仕方」について困り感を感じていたため、特に、1、2年生はソーシャルスキルトレーニング、3年生は進路学習を中心とした、自立活動の実践を教育活動全体を通じて行うこととした。

2 研究仮説

個々の生徒の実態把握と保護者との連携をもとに自閉症・情緒障がいのある生徒に対する3年後の進路を見据えた自立活動の指導を行えば、生徒が自己の理解を深め、納得のいく進路選択ができる。

3 研究内容

【研究内容1】

生徒の実態把握と保護者との連携

- (1) 3年間を見据えた年間指導計画の作成
- (2) 個別の教育支援計画を活用した保護者との連携

【研究内容2】

自閉症・情緒障がい学級における自立活動

- (1) ソーシャルスキルの授業実践
- (2) 学ぶ場を考える保護者との連携

【研究内容3】

納得のいく進路選択をするための自立活動

- (1) 進路選択について考える授業実践
- (2) 保護者と連携した進路決定

4 実践内容

【研究内容1】

生徒の実態把握と保護者との連携

- (1) 3年後を見据えた年間指導計画の作成

本校には自閉症・情緒障がい学級における自立活動の実践はなかったため、「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編」の「流れ図」【図1】を参考にしながら、生徒の実態を把握し、各生徒の目標を設定した。

令和5年4月の生徒の実態						
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
生徒A	△	○	△	△	○	△
生徒B	○	△	△	△	○	△
生徒C	○	△	△	△	○	△
生徒D	△	○	△	△	○	△
生徒E	△	○	△	○	△	△

【図1 流れ図】

これは、令和5年度の生徒の流れ図から捉えた生徒の特性である。

令和5年度は、1年生2名（生徒A・B）、2年生1名（生徒C）、3年生2名（生徒D・E）の合計5名の学級である。

4月の各生徒の日常生活や学習の実態を把握することから課題を明確にした。特に、交流学級での学習する姿や、5人全員がそろって学習する国語や英語の授業時の姿を参考に生徒の特性をつかんだ。自立活動の内容の6つの区分のうち、主に「人間関係の形成」「コミュニケーション」の2つの区分について、全員が該当していると考え、1、2年生はソーシャルスキル、3年生は進路学習を中心とした年間指導計画をたてることにした。【表1】

◆自立活動年間指導計画(自閉症・情緒障がい学級)◆		
	1～2年生	3年生
【1学期】	① 中学生のための7つの基本スキルの学習 ・「聴く」「話す」「観る」「理解する」 ・「考える」「気持ちに気づく」「自分を知る」 各スキル	① 自分を知る学習 ・進路選択・進路計画 ・夏の高校見学について ・夏休みの学習
6月	自己理解のふりかえり	進路選択(1)
【2学期】	② 集団生活に必要なスキルの学習 ・「気持ちのよいあいさつ」「質問する」 ・「説明する」「他者を尊重する」各スキル	② 自分を高める学習 ・学習の質を高める ・自己実現
	③ 相手の気持ちに寄り添うスキルの学習 ・「友だちを励ます・元気づける」 ・「友だちの困難にのる」「友だちに謝る」 ・「上手に断る」各スキル	進路選択(2)
	④ 自分の気持ちを伝えるスキルの学習 ・「人を傷つけないで自分の意見を伝える」 ・「人に話しかける」・「頼みごとをする」 ・「他者をほめる」・「感謝する」各スキル	③ 2学期の予定 ・学習計画 ・学習計画 ④ 進路を決める学習 ・決め手考える ・学習計画 ・進路に向けた手続き
11～12月	自己理解のふりかえり	★進路選択
【3学期】	⑤ 感情を扱うスキルの学習 ・「怒りに振り回されない」 ・「気持ちを言葉にして伝える」 ・「ストレスとうまくつき合う」各スキル	⑤ 力を発揮する学習 ・「ストレスとうまくつき合う」 ・「力を発揮する」 ・「確認する」各スキル
2月	自己理解のふりかえり、次の学年のめあて	⑥ 卒業と高校入學まで

【表1 3年間見据えた年間指導計画】

但し、指導してすぐには結果が出にくいことを念頭におき、各学期で1つできるようになればよいという中期的な目標を設定した。その内容を「個別の教育支援計画」に記載することで、保護者と共通理解を図るようにした。

毎時間、学習したスキルをどんな場面で生かせそうか考えたり、学期ごとに学習したスキルを生かした場面の振り返りをしたりすることで自己理解を行い、学習及び生活上の困難を改善していくような計画をたてた。

(2) 個別の教育支援計画を活用した保護者との連携

5月に面談を行い、前担任から引き継いだ生徒の情報と新しく担任した1か月の生徒の様子を照らし合わせ、家庭の様子や保護者のニーズを確認した。

また、「個別の教育支援計画」を活用する上で、過去にさかのぼり、毎年記入されている点や重点的に記入されている点を、注意深く捉えるようにした。

そして、各学期末に年間や学期ごとに付けた力やその手立てと生徒の様子を保護者に面

談で伝えると共に、保護者の思いを受け止めるように努めたり、進路に対する考えを確認したりした。

実践例 1 個別の教育支援計画を生かしたアプローチ

生徒Bは、進路を見据えて、小学校5年生時に知的学級から自閉症・情緒障がい学級に措置替えを行った生徒である。

「個別の教育支援計画」の中で、急な変更により弱かったり見通しをもつことが苦手であったりという記録がされていた。学習や日常生活に意欲があるものの、「〇〇を伝えてほしい」「〇〇をいつまでに持ってくるように」という話をすると返事はするものの忘れてしまう傾向にある。

対応としては、メモをすることや黒板に必要な情報を掲示する手立てをとることによってできるようになった。一方で、学習についても同じような実態があり、通常学級と同じ授業進度が求められる自閉症・情緒障がい学級では、新しい学習に対応しにくいことが予想される。

生徒Bの保護者との面談後、以下のようにアプローチした内容である。

《保護者が心配な点》

- ・高校進学に向けて、学習内容を理解できるのだろうか。
- ・家庭学習は、どのように進めていけばいいのだろうか。

《アプローチ内容（1・2年時）》

- ・学習内容の定着を図るために、知識問題や計算等の繰り返し取り組みやすい問題を、確実に身に付けられるようにする。
- ・学習計画を1週間ごとに立て、取り組む内容と時間を決める。

《アプローチ内容（3年時）》

- ・学校行事や定期・実力テストの実施日を定期的に確認し、1日、1週間単位で学習計画と毎日の取組の確認を行うようにする。

面談後、自宅で保護者と生徒Bで相談して家庭学習に取り組む時間を決めて、学習計画表を作成した。

取り組む教科と学習内容を週の始めに1週間記入し、保護者と担任で確認することで、2年生以降は、声をかけなくても自分から家庭学習に取り組むことができるようになった。

【研究内容 2】

自閉症・情緒障がい学級における自立活動

（1）ソーシャルスキルの授業実践

1・2年生の自立活動では、「人間関係の形成」や「コミュニケーション」のスキルを身に付けるために、さまざまなソーシャルスキルを身に付ける学習を行った。毎時間の授業展開【図2】は、以下の通りである。

〈授業展開〉

- ①授業の導入・学習するスキルを確認する。
(体験談や最近の話題の紹介)。
- ②課題……授業の目的とポイントを確認する。
- ③モデリング・場面絵を提示し手本を示す。
- ④リハーサル・ペア交流等で練習し感想を書く。
- ⑤深める……別の場面を提示し、スキルのポイント生かした方法を考える。
- ⑥振り返り……自分が生かしたい場面を考える。

【図2 ソーシャルスキルの授業展開例】

1つ目は、課題化から学習するスキルのポイントをおさえることである。授業の中で、何度もスキルのポイントに立ち返ることで、実際に自分が生かしたい場面を考えられるようにした。2つ目は、【場面絵1】に登場する人物になりきって実演し、仲間と考えを交流しあうことである。3つ目は、学習したスキルを別の場面におきかえて考えることである。

実践例 2 「気持ちに気付く」スキルの学習

①授業の導入

導入の場面では、生徒の日常生活から、うれしい気持ちや体で喜びを表すと予想されることを問いかけたり、悲しい気持ちや緊張しそうなことを問いかけたりすることで、日常生活の一場面を想起させた。

②課題

自分や人の気持ちに気づき、「気持ちの言葉」と「身体の変化」をつなげられるようにしよう。

場面絵 1 (気持ちに気付く場面の説明)

1. XはYに100M走で勝てない。
2. XとYが大会の選手に選ばれ、Xは練習した。Yは練習せずに友達と話をしている。
3. 大会当日、Xは自己ベストを更新する速さでゴールした。
4. Yは、練習していないのに、自分(X)より記録がよかった。

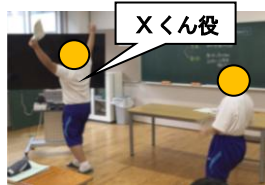
③モデリング

相手の「気持ちに気付く」ための場面絵1を提示し、自分がXの立場だった時の気持ちをワークシートに記入した。

そして、実際に場面絵1を演じ、Xの「気持ちの言葉」と「身体の変化」に着目してどんな気持ちだったのかを交流した。【写真1】

教師：Xくんはどんな気持ちですか？

生徒B：手をあげているから、うれしいと思います。



生徒C：自己ベスト

を出しているから、うれしいと思います。 【写真1 実演の様子】

生徒E：Yくんを見ているXくんはうれしなさそうです。

教師：Xくんがうれしくない理由は何ですか？

生徒A：Xくんは練習してきて記録を更新してうれしかったけれど、あまり練習していないYくんの方が自分よりいい記録だからです。

生徒C：実際に演技してくれたのを見ると、Xくんの気持ちの変化がよく分かりやすかったです。

生徒D：Xくんは、Yくんに対してイライラしているけれど、私は、努力して「自己ベスト」を更新したことが素晴らしいので、自分のことを褒めてほしいと思います。

交流の中で、本時のポイントである相手の気持ちに気付くため、「気持ちの言葉」と「身体の変化」に着目し、仲間が演じることでより課題を意識して考えることができた。また、Xのよさを客観的にとらえることができた。

④リハーサル

代表生徒が演じた姿とワークシートに記載してある内容を参考にしながら、ペアを変えながら場面絵を練習し、感想を記入した。

《生徒の感想》

- ・仲間の考えを聞くことで、Xくんの気持ちを考えながら練習できた。
- ・仲間が実演してくれたおかげで、「気持ちの言葉」と「身体の変化」をつなげて考えることができた。

⑤深める

本時で学習したスキルをもとに、普段の自分

たちの姿の中で、「気持ちの言葉」と「身体の変化」がつながる場面をタブレットを活用して考えを共有した。これは、5人という少人数ではあるが、学年が異なっても、自分の考えを話すことが苦手な生徒にとって、意見を出しやすい場を設定するためである。

《全体交流で深めた場面》

- ・うれしい → おしゃべりになる。
- ・イライラ → 落ち着きがなくなる。
- ・かわいそう → 涙が出る。
- ・わくわく → 笑顔になる。

「②課題」で説明したスキルポイントで考えているのかを評価する基準とした。

教師も評価するが、生徒もお互いが考えた内容を評価し合うことで、自分の考えを深めたり自信をもてたりすることができた。

⑥振り返り

今後どのような場面で、学習したスキルを生かしたいのかという点を意識しながら、ワークシートに振り返りを記入した。

《生徒の振り返り》

- ・交流学級のFさんと話をするときに、今日学習したスキルを生かしたい。
- ・私は、今まで何度か教室を動き回ることがあった。自分の気持ちがイライラして落ち着きがない時であることが分かりました。

実践例3 授業の振り返りの工夫

様々なソーシャルスキルを学習した後、スキルが定着できるように、終わりの会で仲間のよさ見つけを行ったり、自分のできたことを振り返ったりした。学期の終わりには『自己理解チェックリスト』を記入し、13の項目について変容を確認した。

『自己理解チェックリスト』は、出題数も少なく、生徒が変化を理解しやすい点から、「STTワークシート」（編者：LD発達相談センターかながわ）のワークシートを活用した。

特に、生徒の変化（5名中4名の数値が上がった）があった項目は、以下の内容である。

- ①自分の気持ちのコントロールがうまくできる。
- ②自分でできなかったことを人や物のせいにならず、素直に認めることができるタイプである。
- ③自分は苦手なこともあきらめずに、自分のペースでがんばろうと思うタイプである。

《生徒の振り返り》

- ・バレーボールの学習で、仲間がサーブを打って点数が入った時に、「サーブで点が入って、すごいね！」と『わたしメッセージ』を使ってよさを伝えることができた。
- ・毎日、仲がよい友だちと話す時、自分ばかり先に話してしまうけれども、友だちが話し終わってから、話すことができた。

(2) 学ぶ場を考える保護者との連携

中学校卒業後の進路について、県立高校の体制として特別支援学級はない。現在、自校型、他校型、巡回型等の通級を充実させている段階である。また、通信制や療育手帳を必要とし職業教育に力を入れた高等特別支援学校等の選択も含めて進路選択をしなければならない。そこで、人間関係づくりや集団が苦手な特性がある生徒の学ぶ場について保護者と連携しながら考えた。

実践例4 進路選択のための交流学級での過ごし方

生徒Cは、集団行動が特に苦手な特性をもった生徒である。グループでの話し合い活動では何も発言できなかつたり、理科の実験や給食当番等の集団活動になると、仲間と合わせて行動できなかつたりすることが多かった。

保護者は、進路選択の幅を広げるために、特別支援学校を含めた進路選択をできることを希望して、中学入学時に知的学級から自閉症・情緒学級に学ぶ場を変えた生徒である。

そこで、学期ごとの自己理解のふりかえり後、高校の紹介を行うようにした。

全日制や通信制高校の学習について、興味をもてるようになってきた1年生の終わりに、中学校卒業後の学ぶ場について話をした。生徒Cの困り感は、高校で学ぶことへの興味はあるものの集団で学んだり生活したりすることへの抵抗であった。

《授業以外の交流学級での活動の場面》

- ・朝の会
- ・帰りの会
- ・係活動
- ・給食（給食当番含む）
- ・掃除

そこで、高校での集団で学ぶ場をイメージすることができるために、上記の活動について、少しずつ交流学級の仲間と取り組めるように本人と保護者の確認をとりながら、生活する場を決めた。2年生の最初は、「帰りの会」、後期は「給食（当番活動も含め）」も交流学級で生活した。

不安になったら、自閉症・情緒障がい学級に戻ってきてよいことを伝え、交流学級の担任と生徒Cが不安になった時の対応について共通理解をしたり、班員の生徒からの声かけがあったりする中で、少しずつ集団生活に安心して生活できるようになった。

また、困ったときの対応方法を自立活動の時間にソーシャルスキルを学習することで、3年生の進級時には、交流学級で係活動や掃除についても、協力して役割を果たせるようになった。そして、高校での学ぶ場のイメージがもてるようになってきた。

保護者と情報を共有していくことで、進路について、一緒に考えてもらうよい機会となった。

【研究内容3】

納得のいく進路選択をするための自立活動

(1) 進路選択について考える授業実践

3年生の自立活動では、1、2年生で学習してきたソーシャルスキルを生かしながら、生徒が納得のいく進路選択ができるための実践を行った。

5月、特別支援学校を含む学校の種類や特色について説明した。生徒は、近隣の高校名は知っているが、学校によって学ぶことが異なることや少人数で学べる学校があることを初めて知る生徒もいた。また、就労を目指す高等特別支援学校と特別支援学校についても説明した。

実践例5 高校見学会で見学する視点

7月に、生徒が納得のいく進路選択をするために、夏の高校見学会や秋の1日入学での何を見学してくることがよいのかポイントを確認し、特に見学したい内容を3つ決めた。

《高校見学会の見学ポイント》

- ・学べること
- ・学び方
- ・部活動
- ・特に力をいれていること
- ・進路先
- ・通学方法
- ・通学時間
- ・制服
- ・校舎の様子
- ・生徒の表情

以下、ワークシートの内容である。

《生徒の振り返り》

- ・どんな方向に進むのか分からないので、普通科と工業科を見学したい。
- ・部活動を体験してみたい。
- ・一緒に学ぶ人数が気になるので、学び方と授業の様子を見たい。

生徒Bは、食に興味があったため、食について学べる学校を中心に見学し、生徒Cは、自分

に合った学ぶ場に不安があったため、高等特別支援学校と通信制と全日制を見学し、感じたことを記録するようにした。

実践例6 学習計画の作成と振り返り

進路を選択していく上で、毎日の授業と定期テストや実力テストに向かっていくことが大切である。目の前の学習や数日後のテストについては、意識して取り組むことができるものの、中・長期的に見通しをもって、自分で学習することが苦手な生徒が多い。

そのため、学校行事とテスト、進路に関することを板書に位置付けることで見通しをもたせ、具体的に自分で取り組む学習や毎日の生活で意識することを自己決定し、ワークシートに記入した。そして、朝の会に自分の決めた学習の振り返りを毎日行った。取り組む学習の視点と生活の視点は以下の内容である。【図3】

そして、朝の会に自己決定した振り返りを毎日○△を記入して振り返りを行った。自己決定ができた時は認め、△が続いた時に声をかけ、軌道修正するようにアドバイスをした。

【図3 学習計画表（3年時）】

《学習や生活で自己決定する視点》

- ・得意や不得意教科を明確にする。
- ・何を活用して学習するのか。
- ・いつ家庭学習を行うのか。
- ・家庭学習の取組時間。
- ・就寝と起床時刻。
- ・ITC機器の利用の約束。

自己決定内容を○△で可視化する。

(2) 保護者と連携した進路決定

保護者とは、1年時より定期的に「個別の教育支援計画」の懇談を行う中で、進路について保護者の思いを確認するとともに、生徒の考えを伝え、同じベクトルで進路選択ができるようにした。

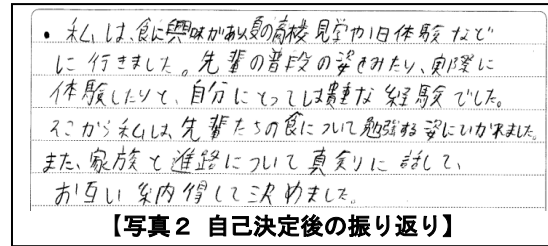
そして、3年生の11月に、12月の三者進路懇談に向けて、自分の進路を自己決定するための自立活動を行った。

実践例7 自己決定

進路を選択する上で、大切にしたいことを交流しあった。選択する理由を上げていく中で、特に進路を選択していく中で、大切にしたいことを3つあげた。そして、授業の終わりに自分の進路選択の「決め手」を述べてワークシートに記入した。

生徒Bが3年生の11月に、進路について自

己決定後に書いたものである。【写真2】



5 成果と課題

- 「流れ図」を活用して、生徒の実態を把握し保護者と共通理解を図りながら、本校の自閉症・情緒障がい学級の3年間の自立活動の授業モデルを作成することができた。
- 自閉症・情緒障がい学級の自立活動の学習として、「人間関係の形成」や「コミュニケーション」のスキルを身に付けるためにソーシャルスキルを取り扱うことは、学ぶ場を考える方法として効果的である。
- 学校見学や計画をたてる視点を提示し自己決定する場を設定することで、納得のいく進路選択に結びつく。
- 学習したソーシャルスキルについて、自立活動の時間だけでなく、日常生活も含めた継続的な指導を行う必要がある。
- 特別支援学級に在籍する生徒が増えている傾向がある中で、学校全体に自立活動を周知して、通常学級の担任と連携を取りながら、職員全体で生徒の指導にあたっていけるようにする。

6 参考文献

- ・発達障害がある子どもの進路選択ハンドブック 講談社（2010）
- ・親子で理解する発達障害 進学・就労 準備の進め方 河出書房新社（2016）
- ・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 文部科学省（平成30年3月）
- ・生徒が変わる 学生のソーシャルスキル指導法 ナツメ社（2018）